

環境について  
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

# Save The Kikuchi River



## か

つてタニシは水田や溜池にいくらでもいました。今の子どもたちはタニシと言えはジャンボタニシを思い浮かべるかもしれません。しかしジャンボタニシは従来のタニシと全然違う種類のものです。私たちが子どもの頃は学校から帰ると、先ず川へ水浴び（水泳）に行つて、帰りにはタニシをいっぱい拾つてきて、それを小石で叩き割り中の身を取り出してツケバリの餌にしました。2メートル程の糸に大きな針（ガメバリ、ナマスバリ）を付け、竹串を竿にして川岸に突き刺して二晩投げ込んでおくと、翌朝大きなウナギやナマズがかかっていたものです。ウナギてほにも叩きつぶしたタニシをシユロの皮に包んで押し込んで餌にしてみました。そのようにタニシとは深い縁がありました。

タニシは「田螺」と書きます。螺とは海産の巻貝のこと、つまり「田の螺」タニシと名付けられたのでしよう。軟体動物門、腹足綱、原始紐舌目、タニシ科、タニシ属、タニシは当然淡水産の巻貝に属しますが、殻は案外柔らかく、小石で簡単に割ることができます。日本にはマルタニシ、オオタニシ、ヒメタニシ、ナガタニシの

4種類がいるといわれますが、我々にはなかなか区別が付きません。ナガタニシは琵琶湖だけに棲息する固有種だから本県にはいません。本県に居るのはマルタニシとヒメタニシではないかと考えられます。殻高4センチで右巻きで円錐形です。色は黄褐色で蓋は楕円形の完全にふさがりようになっています。見かけは泥まみれで汚れた格好をしています。すが表面にコケが生えて、それにほこりのような物がくっついているので汚らしく見えますが、よく洗えば表面はつるつるした茶褐色の面になります。頭部には1対の触覚があり、その付け根に目があります。雌は交尾によつて受精し卵が小貝になるまで体内で保護するので卵胎生であり稚貝にまで育った貝を10数個生みます。小貝は親と同じ形をしています。

春先になつて田を鋤き起こし水が張られると、土の中で冬眠していたタニシが急に元氣を出し、水田いっぱい繁殖しますが、最近この辺りではそういう光景は見られなくなりました。ジャンボタニシに水田を占領されてしまったからです。漫画家の手塚治虫氏は、奈良県立医科大学卒業の医学博士で、そ

の学位論文はタニシの「異型精子細胞における幕構造の電子顕微鏡的研究」という難しい論文です。その論文は今も奈良県立医科大学の図書館に保管されているそうです。

分布は広く、ヨーロッパ、アフリカ、北米、オーストラリアの川、湖、沼などの淡水域に棲息していますが、南米大陸と南極大陸にはいないようです。日本では全国の平地の池、沼、川の淀んだところの水底に棲息しています。

ツケバリの餌にもしますが、まだ農薬をあまり使わない頃、我々も良く食べました。泥を洗い落として湯がいて、中身を突った竹串で引つ張り出して硬い身（足の部分）だけを取り出します。それを甘露煮や油炒めにするのとビールのツマミには最高です。

ジャンボタニシは、タニシとは別の科でリングガイ科リングガイ属に属し、タニシが卵胎生であるのに対し卵生です。食用として台湾から輸入し繁殖されましたが、実際は食用にされることなく、逃げ出したものが繁殖し、稲の苗の食害となつています。

## 歴史調査の楽しみ方 志口永城跡

13

大田 幸博

(元・菊水町史編纂委員会副委員長)

## 牛

舎の北東下から、谷部へ延びる張り出し区画(XII区)が見つかりました。最上段の帯状地形(①)から5段の小段地形を下ると、削平地(⑧)があり、全長29.5m、幅7.3m、最上段と高低差は17.9m、東端に見栄えの良い小山がありました。高さ3m、上面域の幅3.4m、長さ4.8mで、中心部が幅1.2m、長さ2.2mの範囲で、さらに60cm高くなっています。張り出し丘陵の削り残しで、四方の法面に、削り落しが確認されます。まさに、「物見の場」です。

小山の東下には、削平地(⑨)がありました。全長31m、幅4.25m、小山とは、8.8mの高低差があり、この法面も、削り落されています。この区画は、さらに、両端で二又に分かれており、いずれも造成されています。

東側(XII-1)は、全長36.5m、幅5.5.25mの「く」の字形の削平地で、北端に2段の小段が付いています。尾根の東西

両側は削り落されており、地形が、城跡の土橋に、とても似ています。

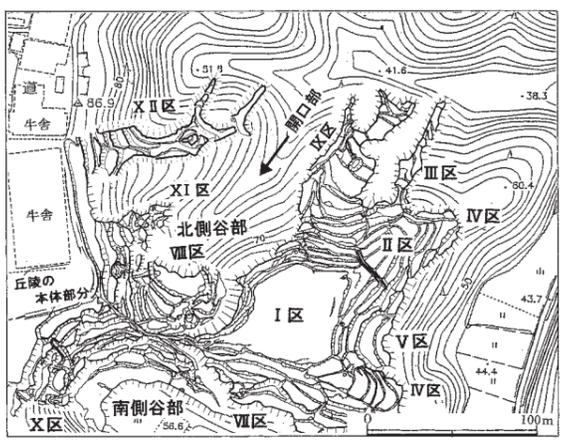
西側(XII-2)は、緩傾斜の小尾根に刻みが入り、計5段を数えます。東側と比べると、平地部分が少なく、造成の割合が低いようです。北端下は、いずれも谷部の湿地になります。

今回、見つかったXII区は、縄張りの、北西部分に該当します。全長110mに及び、志口永城跡の北西土塁線に該当します。敵方が、志口永城跡の北東側(開口部)から侵入して来た時に、効果を発揮する防禦施設です。

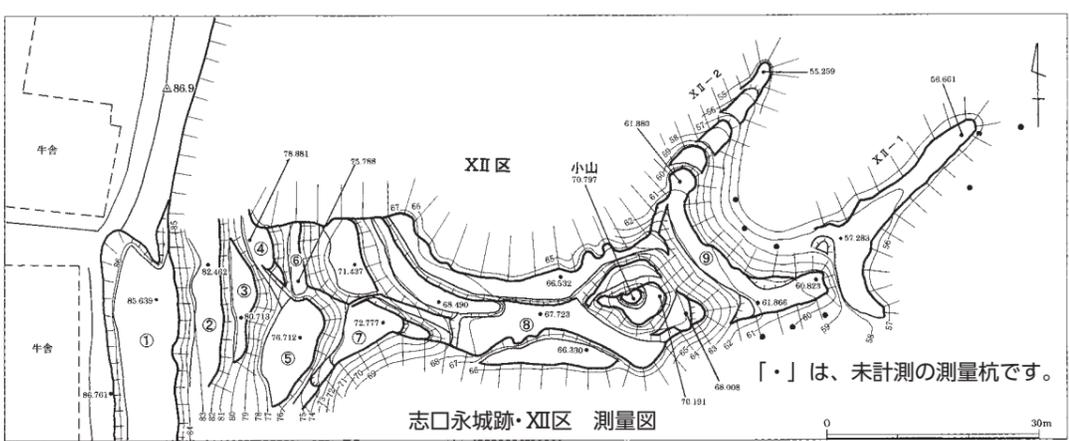
この志口永城跡は、文献資料に無く、当初は、小規模な城跡に見えました。しかし、調査が進むにつれて、非常に手が込んだ縄張りという事がわかり、素晴らしい城郭だとの認識に変わりました。



▲ ⑦の東端より、削平地(⑧)と小山を見る



◀ 志口永城跡 全体図



「・」は、未計測の測量杭です。

志口永城跡・XII区 測量図